

牧草園藝



春を迎える北国の酪農

北海道のこの冬は、やや多雪で、気温もひく目に経過している。寒く、日照不足、然も舎飼いが主体となる北海道の乳牛は、余り良い条件下にいるとは思われない。

しかも、北海道の冬期間は、酪農家にとって畑の仕事はないから、全力を乳牛の管理と搾乳にかけたいが、とかく夏の間の自給飼料の生産が不充分であったり、牛舎内の保温や運動不足で、いわゆる冬乳は減産する傾向にある。暖地では、夏の暑さのために牛乳が減産、寒地では冬の寒さのために減産が、従来から常識のように考えられているが、とんでもない誤りである。

いわんや、冬も半ばを過ぎるとサイレージや乾草が、だんだん心細くなり、最近のように購入飼料の価格が値上りすると、これも節約して、大切な乳牛は寒さと栄養不良で、乳を出すどころか、健康を維持することも困難になって、春を迎えて倒れてしまった例も少くない。こんなことでは酪農ではなく、落農である。

こんな破目に陥らないためには、勿論冬期間の飼養管理に手を尽すだけでは駄目である。夏の間に、良く肥した畑に、良く実の入るデントコーンや収量の多い家畜ビートを充分に栽培し、真剣にそしてロスのないように収穫貯蔵することから始めなければならない。

勿論、自給飼料の主体となる牧草も、マメ科の入った若々しい牧草地をもって、適期に良い乾草やグラスサイレージを、天候がわるいとか、労力がかかるとか、ブツブツ言うことをやめて、可愛い乳牛のため、そして自分の経営のため、努力して貯えなければ駄目である。

太陽のエネルギーを一杯あびて夏の間に牧草地に放牧・運動させ、太陽のエネルギーを腹いっぱい吸いこんだ緑の乾草を充分貯えることは、冬中の太陽不足を補う大切なことなのだ。

今春は、今からこの夏の自給飼料増産確保計画を真剣に考え、設計し、そして実行し、来年の冬

は、悠々と大威張りで、寒さに負けず乳牛の健康を維持して乳をしぶり、然も購入飼料も節約しよう。

この冬、充分な自給飼料を用意出来なかった人は、今、乳牛の飼養には特別に注意をしなければならない。

乳牛は、分娩後泌乳する。泌乳の量は牛の能力に応じて2、3ヶ月後に最高となり、その後は自然に減ってくる。この自然の泌乳の変化に合せて、飼料の増減してゆくのが、一番上手なやりかたである。

ところが、どんどん乳量があがってくるのに自給飼料が足りない。又、購入飼料で補充もしてやらないとすれば、どうなるか。牛は自然の勢いで泌乳ホルモンが働いて、飼料の不足分を骨身を削って、乳の方へ廻すことになり、みるみるうちに痩せてくるのだ。そしてやがて増えている乳量もおちてくる。

もうすぐ春だ。春になったら青草を手一杯喰わせて乳量を回復させようとしても、どっこい手おくれとなってしまう。それは、牛は先ず体力を回復するために多くの養分を必要とするからだ。体が回復してから始めて乳量の増加となるが、これには可成りの月日が必要となる。いわんや、起立不能のようになってしまったら何をか言わんやである。

この冬、自給飼料の量が不足だったり、その質が良くなかった人は、多分費用はかさむが、あとあとのことを考え、不足する養分を購入飼料で補ってやることだ。こんな場合に購入飼料を節約したつもりでも、牛が参ってしまっては節約どころか、損の上積みとなってしまう。

春の日差しは日一日と暖かくなってくる。やがて来る青草の日にそなえて、乳牛に栄養をあたえて体力を作るのが、春を迎える乳牛管理のポイントといえよう。

(なかの)